

91. 守山市服部遺跡出土の 円窓付土器について

弥生時代中期以降の壺・甕形土器の胴上部に焼成前又は、焼成後に大きな円孔を穿つものを円窓付土器と称し、これまでもその形態の特異性に注目して、度々、論議されているが^(注1)、依然としてその用途・性格等については、不明な点が多く十分な検討はなされていない。そして、円窓付土器の出土地は、特に名古屋市周辺を中心に、畿内から関東という非常に限られた地域に分布しており、その特殊な地域性についても注意されているのである。

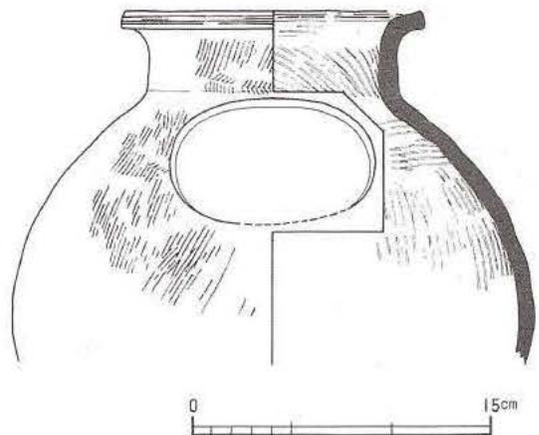
今回紹介する円窓付土器は、守山市服部遺跡より出土したもので、滋賀県下においては、もちろん初めての発見である。当円窓付土器は、弥生時代中期末の住居址より出土したもので、胴部は、ほぼ球状を呈し、焼成前に胴部上方に、長径10.2cm、短径6.2cmの円孔を外面より穿つもので、非常に丁寧な穿孔を行っている。口縁部内外面は横ナデ調整を行い、頸部及び体部内外面はハケ調整後ナデを施す。色調は、淡茶褐色を呈し、胎土は、やや細砂を含むが、緻密で、丁寧な作りのものである。プロポーシオンは、胴部下半を欠失していて、今一つ明らかでないが、ほぼ円形を呈するとみられ、平底の可能性が高い。この種の土器は、県内でも出土例に乏しく、年代を決め難いが、口縁など

畿内第Ⅴ様式の様相がみられる反面、畿内第Ⅳ様式の壺に類似する側面もあるのである。そこで、同住居址内より共伴した遺物をみてもみると、台付無頸壺1点、壺30点、甕39点、高坏2点のほか、磨製石鏃1点、磨製石斧1点などがある。このうち、台付無頸壺は、唐古遺跡^(注2)の出土例(465)に類似し、壺・甕等についても春日山遺跡^(注3)・志那中遺跡^(注4)等でみられるものであり、弥生時代中期末、畿内第Ⅳ様式の新しい段階に並行すると考えられる。従って、当円窓付土器の年代もほぼその時期と考えておきたい。

ところで、この種の土器は、近畿地方においては、大阪府平野遺跡・奈良県唐古遺跡の二ヶ所で出土が知られるのみで、近畿においても特に希な土器形態といえる。唐古遺跡では、北方砂層より台付無頸壺・水差形土器など多量の土器と共に、2個の円窓付土器が出土している。2個共、口頸部が欠損しており全体のプロポーシオンは、不明であるが、算盤珠状の体部に脚台を有するもので、服部遺跡同様に弥生中期末、畿内第Ⅳ様式のものである。

一方、最も円窓付土器が発達したと考えられる愛知県下においては、見晴台遺跡・高蔵遺跡・朝日遺跡・苗代遺跡など多数の遺跡で発見されている。まず、見晴台遺跡・高蔵遺跡などでは、溝状遺構より出土している。

見晴台遺跡では、焼成前穿孔の高蔵式とみられる円窓付壺形土器が出土し、朝日遺跡では、方形周溝墓の溝から5例(?)の出土があり、その内の1個は、焼成



後の円窓で、畿内の文様構成に類似するものとされる。一方、住居址より発見されたものも数例あり、まず、見晴台遺跡では、住居址に伴うか、土壌に伴うものかは、今一つ明白ではないが、山中式で焼成後に穿孔を受けた円窓付土器が出土しており、高橋遺跡では、住居址の貯蔵穴より壺・甕・高坏等と共に出土、焼成後の穿孔である。

この他、関東地方においても数例の出土が知られるが、大部分が土師器で、それもほとんど住居址内の炉・カマド跡付近からの出土である。特に、神奈川県本入遺跡・東京都落合遺跡出土の円窓付土器は、五徳代用の甕形土器の上に載せられ、火熱を受けた痕跡もっていた。

以上、各地における出土状態を簡単に記したが^(注5)、果して、円窓付という特異な土器が、いかなる用途で使用されたかは、以上の諸例からも今一つ判然としない。しかし、円窓付土器が、特に名古屋市周辺のみで短期間に発達し、畿内から関東という狭い地域にごく少数分布することなどを考え合わせると、この種の土器が、いかに強い地域性を持ち、特殊な用途に使用されたかを伺わせるのである。そして、壺ないし甕の体部に円窓を穿つという、土器本来の目的を意識的に失わせているその形態からも「仮器」としての性格が推測されてくるのである。しかし、服部例の如く住居址内からの出土例も多く、先述の本入遺跡、落合遺跡出土例のように明らかに火熱を受けた痕跡もあり、ある種の煮沸に使用されたとも推測されるのである。ただ、それが、日常生活に結びつくものか、又は、祭祀に関わるものかは、これまでの出土例では、今一つ明確にはできないのである。

しかし、円窓付土器とその形態や出土状態の類似するものとして、手焙形土器があり、承譜的關係を指摘

するむきのある点は^(注6)注意される。両者の関係は、否定的要素も強いが^(注7)、用途・性格を考える上では、無視し得ないのである。そして、いずれの場合も溝内・住居址・方形周溝墓などから出土し、煤の付着例が少ないこと等々を考えるなら、一つの想定として、住居址内で一定の目的で使用された後（一時的な煮沸も考へうる）、溝内か方形周溝墓の溝内に埋置（廃棄？）されたとみることも可能ではなからうか。出土例が、希であることもかかる土器が、特殊に、一回的に使用され、廃棄されたことを示すように思われるのである。しかし、これは、全くの憶説に過ぎず、今後の検討が必要と考える。
(大橋美和子)

註

- (1) 吉田富夫「所謂円窓付土器及び其の新例に就いて」(『考古学』9-8、1934)
- (2) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊、1942)
- (3) 丸山竜平「春日山遺跡調査報告」(『昭和50年度滋賀県文化財調査年報』、滋賀県教育委員会、1975)
- (4) 大橋信弥・別所健二・谷口徹「草津市志那中遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会、1978)
- (5) 各地の出土例については、山田鉦一「円窓付土器考—見晴台遺跡出土例の紹介と他遺跡出土例の集成—」(『名古屋市見晴台考古資料館年報I』、1980)を参照した。
- (6) 大参義一「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」(『名古屋大学文学部研究論集』47、1968)
- (7) 江谷寛「手焙形土器の再検討」(『古代学研究』59、1971)

92. 守山市杉江遺跡出土の瓦器について

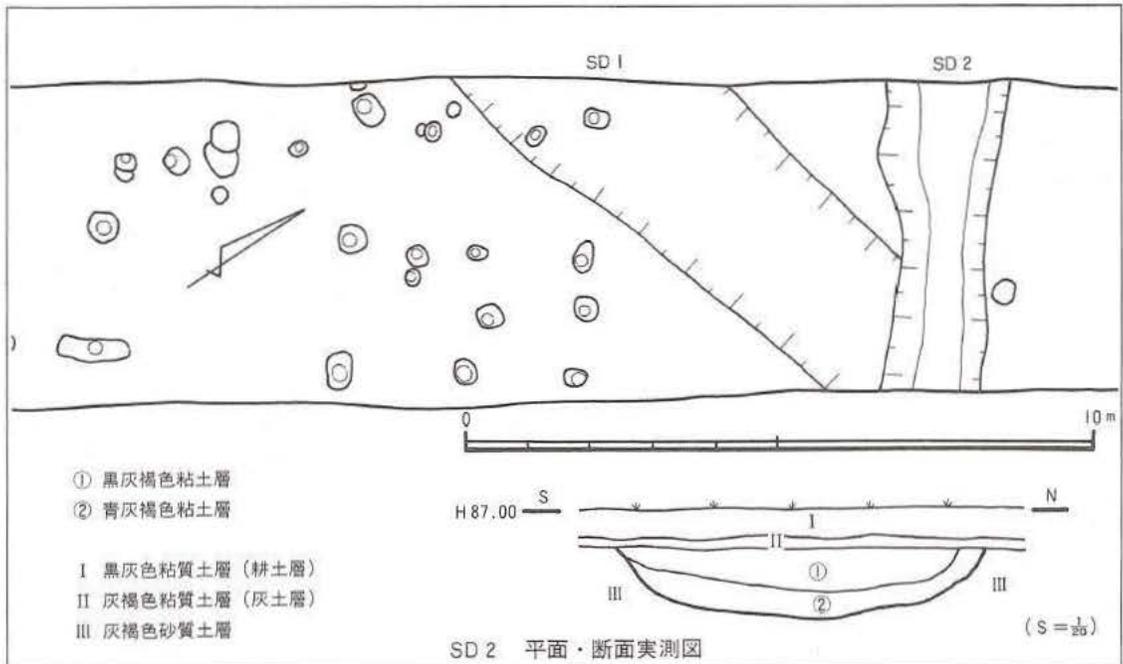
県下における瓦器の出土は、近年草津市野路岡田遺跡^(注1)や蒲生町蒲生堂遺跡^(注2)などで、大量出土が知られ、従来の通説にも変更が必要となりつつあるが、依然として湖南を中心に、黒色土器の出土も極めて多い。そのような中で、1980年夏、ほ場整備事業に先立って実施した守山市杉江遺跡のX区の溝(SD2)から大量の黒色土器壺と共に、数点の瓦器壺と輸入陶磁が出土し、いわゆる瓦器と黒色土器の伴関係を知り得る好資料と考えられるのである。以下、その概略を紹介して、大方の参考に供したいと考える。

1

杉江遺跡は、守山市の西部、琵琶湖に近い野洲川の



形成した微高地上に所在し、東は弥生～平安期の大集落跡である赤野井遺跡に接し、^(注3)西は式内小津神社社地を包み込むように広がる^(注3)とみられるが、今回調査を実施したのは、小津神社の南東400mの地点である。



杉江遺跡X区は、ほ場整備の支線排水路部分に設定した、幅5m、長さ200mの細長いトレンチで、SD 2は、そのほぼ中央付近で検出された幅2m、深さ60cmの人工的な水路である。トレンチに直交して南東から北西に流れるとみられ、SD 1を切り込み、南西にSD 2と軸を等しくする掘立柱建物群が分布する。SD 2は、上下2層に分かれ、上層は黒灰褐色粘土層・下層は、青灰褐色粘土層で、遺物は、上・下層に混在して出土し、分離できなかつた。

2

出土遺物は、黒色土器の埴、皿、土師器の大皿・小皿・瓦器埴・白磁埴である。

黒色土器(4~7) 埴は、口径15.5cm、器高5.9cmをはかる深埴で、逆台形の高台がつく。口縁内外面は、横方向のヘラミガキを加えるものが多く、体部内面はナデの後、ラセン状の暗文を施している。口縁端部が、内反するものと、外反するものがあるが、特に区別する理由は認められない。皿の出土は少なく、大皿4点、小皿1点のみである。いずれも、粘土板を手づくねで成形したもので、口縁外面を強くナデるものと、ナデないものがみられる。

土師器(1~3) 大皿と小皿があり、前者は径8.8cm前後、後者は径14.3cm前後で、黒色土器の皿と同じく粘土板を手づくねで成形したものである。大皿・小皿とも、口縁部外面を強くナデるものと、ナデないものが認められる。

瓦器(8~11) すべて埴で、推定器高7.0cm、径17.5cm前後の浅埴と推定器高8.0cm、径16.6cm前後の

深埴があり、内面は、丁寧に横方向のヘラミガキを施し、見込みに連続輪状の暗文を施す。外面には、粗略なラセン状の暗文を施すものと、施さないものがある。器壁は、極めて薄く、胎土は灰白色の堅緻なもので、土師質のふ厚い壁面の黒色土器埴と対照的である。

白磁埴(12~14) いずれも、いわゆる玉縁の口縁をもつもので、比較的厚手のものと、薄手の二種がある。灰白色の精良な胎土に白色釉をかけたもので、無釉の体部下半が、かなり未調整なものも認められた。

3

以上のうち、土師器については、古代末から中世にかけて通有なものであって、年代的細分は、現在のところ不十分であり、一応当面の考察から除外するとして、まず黒色土器をみてみると、さきに野洲町久野部遺跡例について若干検討したところによるなら、C・Dタイプとしたものに類似すると考えられる。前稿においては、A・Bタイプの実年代を平安京六角堂遺跡例との対比から、12世紀前半としていたが(註4)、六角堂例に伴出する瓦器について、その後の研究により(註5)、寛治5年(1091)の墨書土器を出土した、藤原国明邸のSE7出土例に並行することが明らかとなり、六角堂例に後出ないし並行するとみられるA・Bタイプは、11世紀後半に、従ってC・Dタイプは、12世紀前半に各々実年代を修正する必要が生じたのである。従って、本遺跡例についても、一応12世紀前半代の実年代が想定されるのである。

次に、瓦器については、形態・手法は明らかに大和型に通有なもので、搬入品の可能性が高い。稲垣普也

氏の編年で(注6)、F形式、白石太一郎氏の編年(注7)でII段階の4形式に該当するとみられ、実年代で12世紀前半と考えられるのである。

さらに白磁碗については、大宰府出土資料による森田勉、横田賢次郎氏の編年で(注8)、III形式・IV-1形式に該当するとみられる。これらは、11世紀中葉以降、12世紀代に一般にみられるものである。

以上の検討によって、SD2出土の資料は、ほぼ12世紀前半代の一括性をもつものであることが明らかになった。そこで最後に、SD2出土資料の器種構成を考えておきたい。一応実測可能な土器は総数で248点、そのうち、黒色土器碗142点、同大皿4点、同小皿1点、土師器大皿20点、同小皿71点で、瓦器碗・輸入白磁碗各5点を数える。したがって、この地域において日常雑器として使用されたのは、黒色土器碗と土師器皿が90%以上を占め、瓦器碗・白磁碗は、数%にすぎず、ほとんど例外的な存在であることが伺える。これは、これまでに明らかにされている湖南における一般的な村落のあり方とはほぼ一致するものであった。そして、本遺跡のように瓦器を少数ながら出土する遺跡が、近年、近江においても増加していることは、近江と他地域との交流を示すと同時に近江における黒色土器の展開が、畿内における瓦器生産の強い影響下にあった

ことを示すものと言えよう。(大橋信弥) 註

- (1) 別所健二・石橋正嗣「野路岡田遺跡発掘調査中間報告」(『滋賀文化財だより』37、滋賀県文化財保護協会、1980)
- (2) 昭和56年度に調査実施された。
- (3) 昭和51年度以降、中断をはさんで数次にわたる調査が実施されている。山崎秀二「守山市赤野井遺跡」(『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』、1977)、同「守山市赤野井遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-1・V、1978、1979)
- (4) 大橋信弥ほか「久野部遺跡発掘調査報告書一七ノ坪地区一」(滋賀県教育委員会、1977)
- (5) 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」(高槻市文化財報告書第13冊、高槻市教育委員会、1980)
- (6) 稲垣普也「法隆寺出土の瓦器碗一瓦器碗編年試論一」(『大和文化研究』6-4、1961)
- (7) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」(『古代学研究』54、1969)、同「瓦器生産に関する二、三の覚え書」(『古代文化』192、1975)
- (8) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4、1978)

